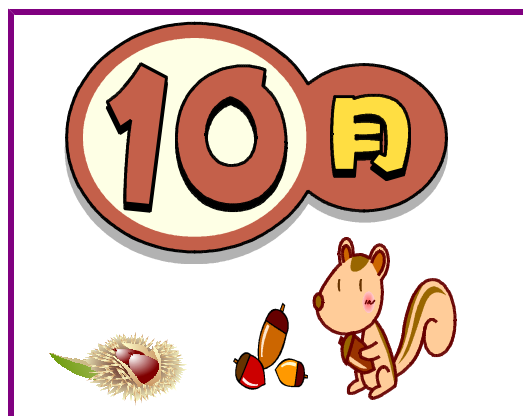


# めぐみイエス・キリスト教会

2020年10月18日(日)第三主日礼拝  
週報「通算第528号」



## 2020年標題聖句

### 第I テサロニケ5章16節～18節

《いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実  
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◇◆◇2020年10月18日 第三主日礼拝 午前10時  
司会 鈴木竜実牧師 奏楽 佐野みゆきさん

### ◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌458「光の高地に」 p. 734

【交読文】 No.60 ヨハネの黙示録第21章抜粋 p. 928

【賛美Ⅱ】 新聖歌332「主はまことのぶどうの木」 p. 528

【使徒信条】

【主の祈り】

【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル賛美No.18「聖なるお方」

【聖書朗読】 使徒の働き5章33節～42節(2017新約p. 242下段)

【礼拝説教】 《ガマリエルの忠告》

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌166「威光・尊厳・栄誉」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

#### ●ポイント1. 「テウダ(チュウダ)」とは？

■チュウダ このチュウダは、紀元前4年へロデ大王が死んで後ユダヤに起った多くの反乱の首謀者の中の一人であったと思われます。彼は400人の手下を従えたが結局殺され、一党は離散してしまつたと述べています。

#### ●ポイント2. 「ガリラヤ人のユダ」とは？

※ルカの福音書2章1節～2節「第一回目の住民登録」 (新約p.239下段)

その頃、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。これは、クレニオがシリアの総督であった時の最初の住民登録であった。

■ガリラヤのユダ クレニオがシリアの総督の時の二回目に行われた住民登録の時ローマに対して反乱を起して殺されました。ユダヤ歴史家ヨセフスは、その反乱は紀元6年であったとしています。

### ●ポイント3. 律法学者「ガマリエル」とは？

#### ※使徒の働き22章3節「使徒パウロの弁明から」 (新約p.241下段)

22:3「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」

■ガマリエル 「神の報い」という意味。ユダヤ教伝承によるとシモンの子、ヒルレルの孫。律法学者で、最高法院議員。比較的穏やかなヒルレル学派に属していました。当時、エルサレムにおいてガマリエルは非常に尊敬されており、「ラビ」(私の教師)よりももっと優れた尊称「ラバン」(私たちの教師)と呼ばれていました。タルムードによれば、紀元50年頃死んだと伝えられています。ミシュナには、「長老ラバン・ガマリエルが死んで以来、もはや律法に対する畏敬と純潔や節制は、まったく失せてしまった」とまで書かれています。

#### ※使徒の働き9章26節～28節「改心後最初の訪問(37年)」 (新約p.251下段)

9:26 エルサレムに着いて、サウロは弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れていた。

9:27 しかし、バルナバはサウロを引き受けて、使徒たちのところに連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に語られたこと、また彼がダマスコでイエスの名によって大胆に語った様子を彼らに説明した。

9:28 サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の御名によって大胆に語った。

#### ※使徒の働き11章28節～30節「救援物資の運搬(48年)」 (新約p.257下段)

11:28 その中の一人で名をアガボという人が立って、世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。

11:29 弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。

11:30 彼らはそれを実行し、バルナバとサウロの手に託して長老たちに送った。

#### ※使徒の働き15章2節「エルサレム会議(49年～50年)」 (新約p.264下段)

15:2 それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。

## ◎先週のメッセージの概要【再び最高法院へ】

《「ご覧下さい。あなたがたが牢に入れた者たちが、宮の中に立って人々を教えています。」この言葉は、最高法院と宮の守衛長にとっては非常にショッキングなものでした。なぜなら、牢にはカギがかけられ、逃げ出すことなど出来るはずもなかったからです。そこで、宮の守衛長と部下の兵士たちは、彼らを再び最高法院に連れて来ました。所で、使徒たちが最高法院に立つのは実は二回目となります。もっとも一回目は、シモン・ペテロとヨハネの二人でしたが、大祭司カヤパは二人に、「イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならない。」と命じていました。

さて、最高法院の二回目の裁判において、「あの名によって教えるてはならないと厳しく命じておいたではないか。そして、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている。」と、大祭司カヤパは言います。

特に後半の言葉は、主イエスを十字架につける為に、ユダヤ人指導者たちが扇動して群衆に言わせた言葉に由来があるからです。それは、ローマ総督ポンテオ・ピラトによる主の二度目の政治裁判の時でした。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上にかかってもよい。」

その言葉と願い通りに、それから約40年後の紀元70年に、聖都エルサレム滅亡の時に、その血はかかることになるのです。それまでは、神様は、ユダヤ人指導者たちの為に、悔い改めの期間を設けられたのです。

さてペテロは、カヤパの質問に答えます。「人に従うより、神に従うべきです。」と。実はここで学ぶべき大切な真理があります。本来ならば、使徒たちは、ユダヤの政治的かつ宗教的指導者である大祭司の命令に従うべきでした。しかし、主の使いは、十二使徒を牢から解放させた時に、彼らに主イエスの命令を直接伝えていきます。「行って宮の中に立ち、人々にこの命の言葉をすべて語りなさい。」と。それだからこそ、ペテロは、「人に従うより、神に従うべきです。」と、確信に満ちて言えるのです。》

## ◎お知らせ

※次回礼拝は10月25日(日)教会にて行ないます。午後礼拝はありません。また聖書の学びと祈り会は、年内は各家庭にて行ないます。